

## 七宝下絵（あま市七宝町伝来）

### ＜概要＞

員 数 一括（113件）  
時 代 明治時代～大正時代

七宝下絵は、七宝製品の制作にあたり、図柄のもとになる図案として描かれた下書きの絵である。

本資料は、あま市七宝町で伝えられてきたものである。内訳は、<sup>くめのちゅうさぶろうけ</sup> 条野忠三郎家七宝下絵 69件と、伊藤常三郎家七宝下絵 44件である。

条野忠三郎家七宝下絵は、明治時代の中頃に、愛知県海東郡沖ノ島村（現あま市七宝町沖之島）の七宝工であった、条野忠三郎<sup>(※1)</sup>の活動時期に使われていたと考えられる。条野忠三郎は、1881（明治14）年第2回、1890（明治23）年第3回の内国勧業博覧会<sup>(※2)</sup>に出品記録が残るほか、1889（明治22）年のパリ万国博覧会で受章している。本資料の一部には作者の銘が記されており、絵師などが七宝下絵の制作に関与していたことが推測されている。

伊藤常三郎家七宝下絵は、尾張七宝の草創期に海東郡遠島村（現あま市七宝町遠島）で開窯した伊藤市左衛門の弟、伊藤儀左衛門を始まりとして、常三郎、常義の3代にわたる七宝窯元で伝えられてきたものである。常三郎は、1881（明治14）年の第2回内国勧業博覧会に出品し、1889（明治22）年のパリ万国博覧会において受賞している。本資料は、明治時代から大正時代にかけて、常三郎の活動時期に使用されていたと推測され、実際に花瓶などの素地に当たり、型紙にして写したりして使用した跡のものが多い。

本資料は、七宝の制作工程のうち、図柄に関する工程の様子を知ることができる重要な資料である。

<sup>(※1)</sup>条野忠三郎 生年不詳—1909年没。

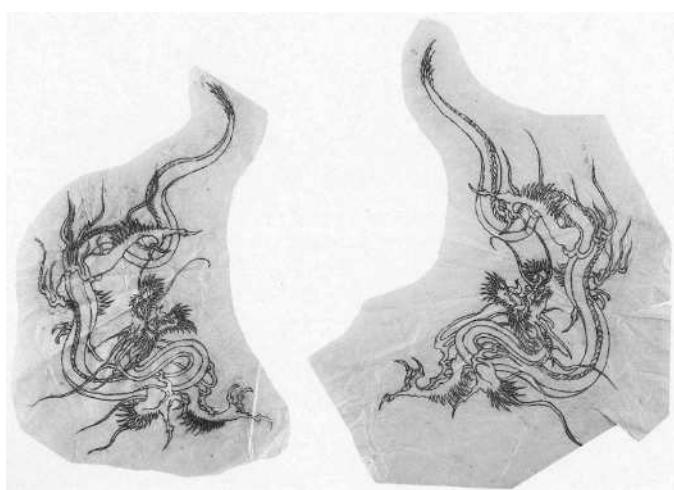
<sup>(※2)</sup>内国勧業博覧会 1877年から1903年までに、東京で3回、京都・大阪で各1回、政府主導により国内の産業振興を企図して開催された。

<sup>(※3)</sup>伊藤常三郎 1859年生まれ—1919年没。七宝窯元の伊藤家は伊藤儀左衛門（生年不詳—1878年没）、常三郎、常義（1891年生まれ—1960年没）の三代にわたる。



七宝下図「牡丹に孔雀のつがい」

(左) 40.6×28.2cm、(右) 40.6×7.2cm あま市七宝焼アートヴィレッジ収蔵



七宝下図「龍」

(左) 25.5×17.3cm、(右) 29.3×22.5cm あま市七宝焼アートヴィレッジ収蔵